はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No. 16　al museo

武蔵野の風景　1『江戸名所図会』より　**久米川**

元弘３（1333）年、府中分倍河原の合戦に先立って、新田軍が幕府軍と激戦を交えたのが、この久米川の一帯。現在の柳瀬川で、東村山市（東京都）と所沢市（埼玉県）の境、武蔵野台地の中央部にあたります。

文政９（1826）年、京都をめざす旅に出た府中六所宮神主猿渡盛章が、最後の見送りの人と別れたのもこのあたり。久米川付近は武蔵野の１つの境と考えられていたのでしょうか。

ここで「今はとてわかるる時はひとと我もただおだひにといふばかりなり」の一首を詠んだ盛章が次にめざすのは、浅間・妙義・榛名の山々（群馬県）。やがて碓氷峠を越えて信濃路（長野県）をたどる盛章は、なんと望遠鏡を使って遠くの山を覗かせる人（「望遠鏡を設け置て姥捨山の景をみせしめ旅客をなぐさむる家」）に出くわします。

この猿渡盛章の旅については、前回の特別展「伊勢へ奈良へ――幕末の旅と社会」で紹介しましたが、次回は「遠くを望む――江戸時代の望遠鏡展」です。　（○）

特別展

遠くを望む ―江戸時代の望遠鏡展―　7月21日(日)～9月1日(日)

西洋から日本に望遠鏡が伝来したのは、今から380年前の慶長18（1613）年頃のことで、徳川家康に贈られたものが最初だといわれています。当時の日本は江戸幕府が開かれてまもない頃で、幕府は望遠鏡が諸国の大名などに普及することを禁じました。というのも、いながらにして遠くの物を見ることができる望遠鏡は、戦の道具として十分活用できるものだったからです。そして、300年近くにわたる泰平の世が続くなかで、望遠鏡は戦の道具から学問、趣味の道具へと移り変わっていったのです。

今回の展示会では江戸時代初期に伝わった望遠鏡が時代の流れとともに、どのように普及していったのかをテーマにし、望遠鏡の代表的な製作者３名（森仁左衛門・岩橋善兵衛・国友藤兵衛）の作品を中心に展示します。

長崎のレンズ職人森仁左衛門(1673～1754年)は享保期(1716～1736年)に望遠鏡を製作した人物で、八代将軍徳川吉宗の命を受け観星鏡という望遠鏡を作りました。彼が製作した望遠鏡は西洋のものに比べても性能が劣っていないという当時の評価が残っています。この頃の望遠鏡はオランダなど海外の輸入品が多く、国産の物がほとんど無かったことから、彼の功績は大きなものでした。

日本において望遠鏡を大量に生産し、世に広めたのが岩橋善兵衛（1756～1811年）です。彼が初めて望遠鏡を製作したのが寛政５（1793）年で、その評価は西洋のものと比較しても劣らないということが当時の随筆に記載されています。また、善兵衛は望遠鏡の製作方法や望遠鏡の模様などを記録書としてまとめ、岩橋家では明治時代初期まで、代々望遠鏡や眼鏡などを製作し、販売していました。今回の展示会でも善兵衛が製作した望遠鏡が最も多く出品され、望遠鏡を大量に生産したことがうかがえます。

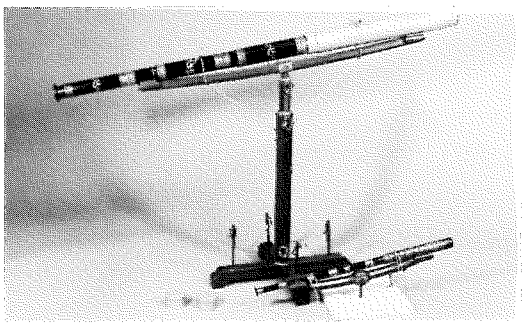
国友藤兵衛（1778～1840年）は、近江国の鉄砲鍛冶で、日本で最初に反射式の望遠鏡を製作した人です。彼が望遠鏡を製作するきっかけとなったのが、文政３（1820）年に、江戸でオランダ渡りのグレゴリー式反射望遠鏡を見たことによります。彼は望遠鏡の仕組みなどを詳細に書きとめ、村に帰った後に望遠鏡の製作にとりかかり、天保４（1833）年に完成させました。藤兵衛は、自作の望遠鏡の性能を確かめるために、天体の観測を始め、その記録が今日多数残っています。さらに、彼の業績として特筆すべきものは、太陽黒点の連続観測を実施したことです。

この展示会では、こうした江戸時代の望遠鏡製作者の実績を紹介するとともに、天文学の普及に果たした役割について改めて見直してみたいと思っています。ぜひ、みなさんもこの機会にご覧になってください。　（K）

特別展記念講演会

「国友藤兵衛の生涯」　8月4日(日)・14:00～ 会議室にて　講師：国友美丸氏(郷土史家)

「我国の望遠鏡のあゆみ―江戸時代を中心に―」8月15日(水)・17:00～ プラネタリウムにて　講師：村山定男氏（五島プラネタリウム館長）※15日は講演会終了後、晴れていれば、天体観測会も行います。



岩橋善兵衛作望遠鏡　大阪市立博物館蔵

天体観測入門講座 その2

太陽面スケッチ —準備編—

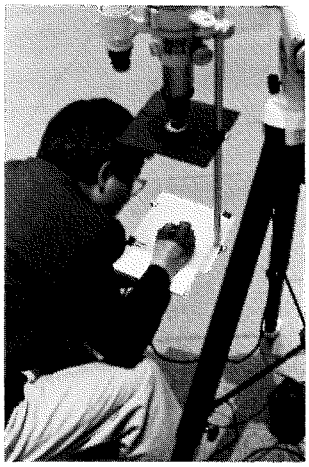
今回より4回に分けて、太陽観測のためのスケッチのとり方と、その結果の整理方法を紹介していきます。1回目は、そのための必要機材・道具について説明いたします。

＝用意するもの＝

小型望遠鏡（屈折赤道儀）、太陽投影板、アイピース、スケッチ用紙、鉛筆、白い紙など。

＝望遠鏡のセッティング＝

まず、用意した屈折赤道儀を据え付けます。



この時に赤道儀の極軸を合わせます。ただ昼間ということもあり、北極星で合わせるというわけにはいきません。そこで、太陽の南中時刻（理科年表で調べ、観測地によって補正します）に、おもりをつるした糸によってできた影の示す南北方向を地面に印します。この南北の印と極軸とが平行になるように三脚を置きます。上下方向については、観測地の緯度と同じ高さにします。赤道儀の架台が、水平になっているかどうかも確かめます。後は、太陽の影を使って望遠鏡を太陽の方向に向けます。

＝スケッチ用紙＝

太陽表面の様子を記録するために、右図のようなスケッチ用紙を用意します。太陽面を表わす円の直径は、小型望遠鏡の場合には15cmが標準です。この15cmの円を先に記入し、中央に見かけの中央線を入れておきます。これは黒点を正しい位置にプロットするのに役立ちます。円の直径は統一しておかないと、後の整理で困るので、正確に作っておきましょう。

＝アイピースと投影板＝

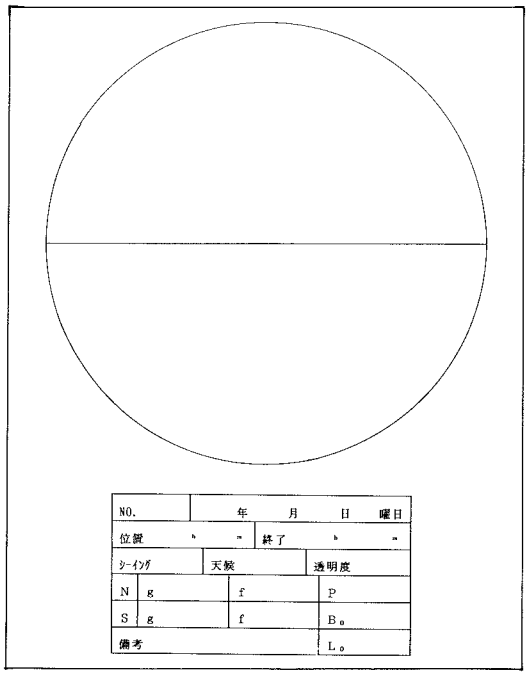
アイピースは、倍率が60倍前後となるような熱に強いミッテンゼイ・ハイゲンスを使用し、投影板は15cm投影用を用意します。ところで、地球が楕円運動しているため、下表のように太陽の直径が変化します。観測するごとに、投影板を前後させてください。

次回は、スケッチのとり方についてを予定してます。

（Ho）

1月	1日	32′	35″	7月	1日	31′	31″
	15	32	34		15	31	31
2	1	32	31	8	1	31	34
	15	32	26		15	31	38
3	1	32	20	9	1	31	46
	15	32	13		15	31	51
4	1	32	04	10	1	32	00
	15	31	56		15	32	08
5	1	31	48	11	1	32	17
	15	31	42		15	32	23
6	1	31	35	12	1	32	29
	15	31	33		15	32	33

太陽視直径の変化（1991年）



府中の水車

後藤 廣史

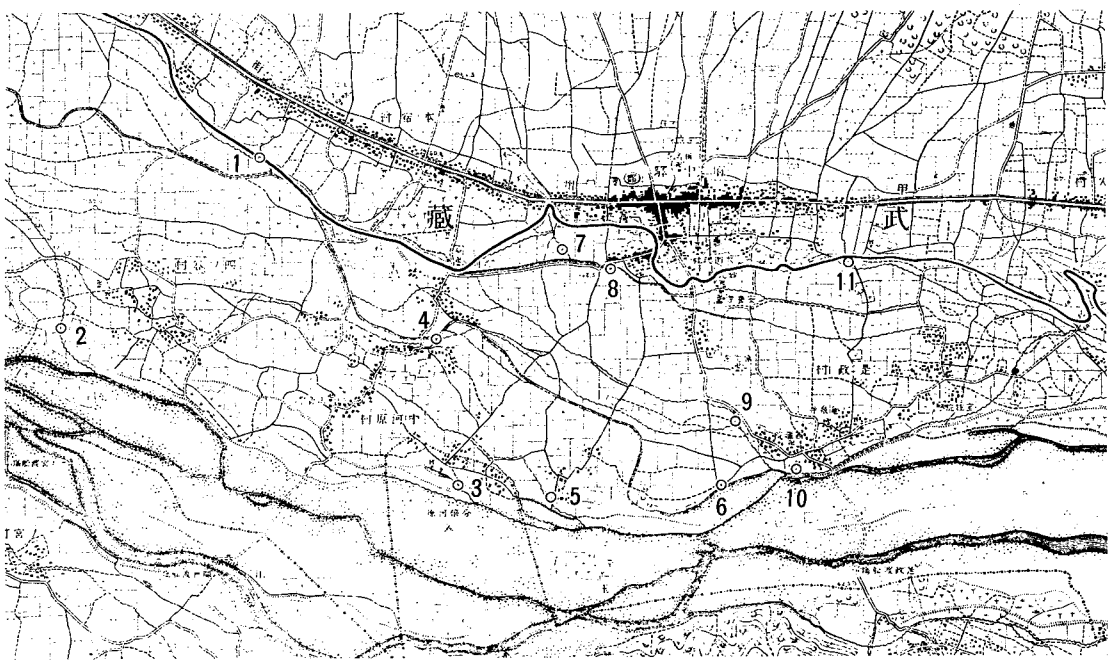
郷土の森に水車小屋が完成し、水車が回り始めました。杵で穀物を搗き、挽臼で製粉しています。それでは、かつて府中市域で見られた水車はどのような水車だったのか、またいくつぐらいあったのかを、少し紹介してみます。

府中市域は、ほぼ中央部を東西に走る府中崖線（通称ハケ）によって、ハケ上とハケ下に分けられます。ハケ上は立川段丘、ハケ下は多摩川の沖積低地のため、ハケ上台地の水利の乏しい畑作地帯と、ハケ下の水田地帯に大別されます。都下で１、２位を争うといわれたハケ下水田地帯には、網の目のように用水路が拓かれ、水車がいくつもみられました。

平坦な土地の用水に掛けられた水車なので、主に山中でみられる地形の落差を利用した上掛け式の水車ではなく、下掛け式もしくは胸掛け式と呼ばれる水車です。胸掛け式というのは、水輪の下の水底を掘り込んで少しでも落差を設け、水輪に勢いをつけさせようとしたもので、この胸掛け式は武蔵野特有の水車の形態となっています。

明治13年測量（同19年製版）の地図を見てみましょう。そこには府中で12か所の水車の存在が確認されます。近年府中市では、屋号、家並、川などの旧名調査が進み、水車関係の報告も少しずつ充実してきたようです。それら調査研究の成果も併せ、地図と照合してみました。

市域の用水を水系別にみてみると、西府用水系、府中用水系、三ケ村（旧上染屋村・下染屋村・小田分村）用水系、二ケ村（旧常久村・押立村）用水系にまとめられるようです。地図上の番号 **2・3** が西府用水系の水車、そして新田川・市川・雑田堀・妙光院下の水系に代表される府中用水系には **4**～**11**がかけられ、**12**は三ケ村用水系の水車です。年代が異なると考えられるため地図では見出せませんが、この他に吉車（押立町２）、旧常久村の共同水車（小柳町３）、ミッチャン水車（押立町４）などがあったようです。



それでは府中の水車がどのような規模、構造であったのか、１例をあげて紹介してみます。

水車臼数其他取調書

北多摩郡西府村本宿三千六百十三番地

持主　松村善兵衛

明治十三年十一月十五日設置

本宿千五百七十三番

字蕨島・民有地第一種

水車場壱ケ所

此水車壱輛　差渡壱丈弐尺

此擣臼　拾柄

但水路樋口　竪三十弐間　横三尺　平落水深五寸

右現在実地ニ就キ取調候処相違無く候也

明治二十二年九月十日　西府村長

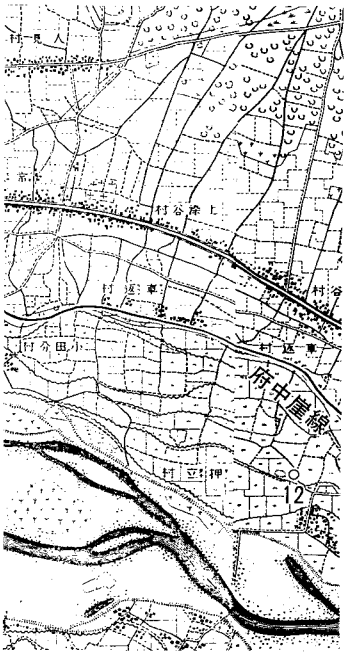
内藤清兵衛

北多摩郡長　渡辺菅吾殿

この文書は、西府村村長から北多摩郡長宛に提出された水車臼等の取調書です。この水車は1の斧車（おのぐるま）で、松村斧吉氏により始められ、昭和３年頃まで動いていました。これによると水輪の直径が1丈2尺（約3.6メートル）、内部の臼・杵が10組あったことがわかり、主に精米が行われていたのでしょう。この斧車の水流は、人工の農業用灌漑用水ではなく、ハケ沿いの湧水（ゆうすい）を源とした自然の流れでした。

かつて水田の景観に花を添えていた水車も、次第にその姿を消していき、昭和の前半には、すっかりなくなってしまいました。

旧常久村の水車



水車・堀の名称〔所在地〕			※番号は地図番号を示す		
1	斧　車	〔日新町２〕	7	白木の水車	〔片町３〕
2	車　堀	〔四谷４〕	8	桑田の水車	〔本町２〕
3	（不明）	〔南町４〕	9	寄合車	〔是政３〕
4	車　堀	〔分梅町２〕	10	鍛冶屋堀	〔是政３〕
5	車　堀	〔南町５〕	11	天地水車	〔八幡町２〕
6	奴　車	〔是政６〕	12	遠藤(水)車	〔押立町２〕

■参考文献

(1) 府中市立郷土館「府中市内屋号等調査報告」1983年3月

(2) 府中市立郷土館「道・坂・塚・川・堰・橋の名前」1985年11月

(3) 府中市郷土の森「府中の家並地図」1991年3月

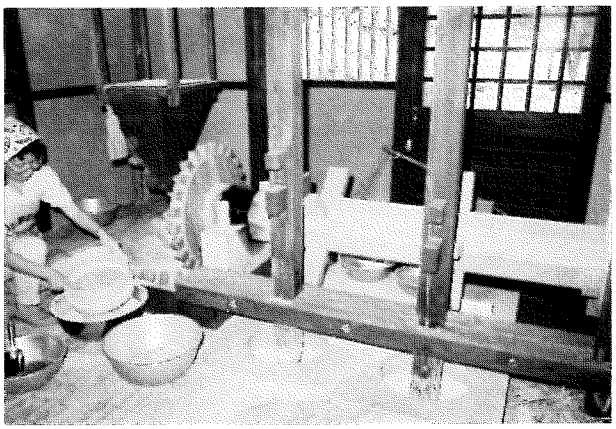
カメラアングル

——園内散策——

郷土の森に 水車 が完成！

この春、郷土の森の旧越智家住宅脇に水車がまわりはじめました。水車といえば、水が上から落ちてくる姿を思い浮かべるかもしれませんが、ここに復原したのは、武蔵野特有の胸掛け式の水車です。かつては府中でも、水田地帯をぬう用水のところどころに水車が設けられていました。今回完成した水車は、水しぶきをたて、ゴットンゴットンと音を響かせながら、茅葺(かやぶき)農家や水田や畑とともに、かつてのハケ下の風景を今日も偲(しの)ばせてくれます。

水車はなんのためにまわっているのだろう。と思う人はいませんか。水車小屋の窓を覗(のぞ)いてみてください。石でできた挽臼(ひきうす)と3本の竪杵(たてきね)が大忙しで働いています。そばや小麦粉の製粉、ワラ打ちや精米など、いろいろな仕事がいっぺんにできます。こんな機械を考えた人間の知恵に思わず感心。これで郷土の森で収穫したお米についてもひと安心です。



◀畑では、野菜の販売を折々しています。今日はとりたてのネギ・ダイコン・ホウレンソウ……など。畑での思わぬ会話も生まれました。

▶5月、水田のレンゲが一面に咲く頃、米作りの一年もいよいよ始まります。レンゲは田起しの時すきこまれ、肥料になります。今年も小中学生からなる「こめっこクラブ」の活躍に期待。

[平成2年度の利用状況]

(H2.4.1～H3.3.31) 開園日数306日

区分		有料 一般	有料 団体	減免	合計
入園者	大人	91,143 人	8,367 人	652 人	100,162 人
	子供	30,448	13,515	1,645	45,608
	小計	121,591	21,882	2,297	145,770
博物館入館者	大人	30,258	6,097	2,309	38,664
	子供	15,152	15,131	214	30,497
	小計	45,410	21,228	2,523	69,161
プラネタリウム観覧者	大人	47,598	4,549	835	52,982
	子供	27,911	22,269	818	50,998
	小計	75,509	26,818	1,653	103,980
合計		242,510	69,928	6,473	318,911

[平成２年度 寄贈・寄託資料一覧]

■寄贈資料

	寄贈者	資料名	分類	数量	備考
1	河内辰夫	新聞資料	歴史	1括	都新聞 他
2	高橋一夫	三ツ組簞笥	民俗	1組	昭和初年代
3	相沢佐一	酒屋用具　他	民俗	7	斗桶等
4	田村　実	教科書	教育	1	
5	小泉和子	文房具　他	教育	9	
6	大庭繁夫	柄杓	民俗	2	杉製、さわら製
7	川崎正利	川崎平右衛門関係古文書	歴史	1括	
8	糟谷正規	郵便局看板・郵便秤　他	民俗	56	
		教科書・参考書・校具 他	教育	110	
		古文書	歴史	1括	江戸時代末～昭和
9	臼井学一	クルリ棒　他	民俗	85	
10	小澤　功	字引大全	歴史	1	
11	矢島　中	関東大震災絵　他	歴史	5	
12	村野熊二郎	龍吐水　他	民俗	16	
13	牧　信	蓄音機・SPレコード 他	民俗	96	
		文房具・教科書	教育	23	大正～昭和
14	梶　辰雄	背負籠　他	民俗	15	
		教科書・ノート	教育	174	昭和
15	松村伸郎	教科書	教育	24	明治～昭和
16	加藤富義	豆腐屋用具　他	民俗	42	
17	藪野　健	旧田中家住宅原画	美術	1	
18	片山八章	桝　他	民俗	11	
19	田中吾一	唐臼	民俗	1	
20	横井賢治郎	国民服　他	民俗	3	
21	夏目与志男	屏風	歴史	2	
22	向山敏治	牛蒡剣　他	民俗	7	戦時生活関係
23	井上秀雄	岩石類	自然	10	福島県産 他
24	矢島典夫	石炭	自然	1	北海道産

■寄託資料

	寄託者	資料名	分類	数量	備考
1	田井　裕	人物埴輪	考古	2	茨城県内出土か
2	矢島　中	文書類	歴史	3	

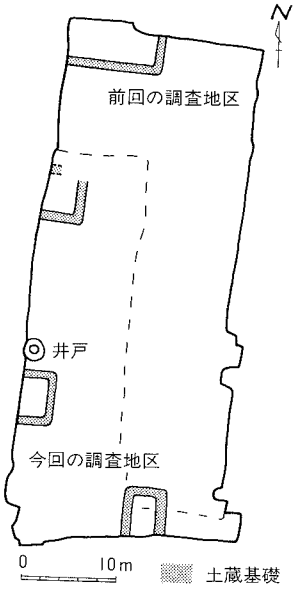
＝最近の発掘調査から＝

今回は、大国魂神社前、旧甲州街道北側の旧田中家住宅跡の調査に関するお話です。田中家は、江戸時代中頃に車返村（現白糸台付近）から府中宿へ移ってきたと言われています。天明年間（1781～1789年）になると、「柏屋」という屋号で商売を営み、かなりの大店になったそうです。そうしたことから、明治天皇の多摩川行幸の際には、休憩所・宿泊所としてこの田中家が選ばれ、「行在所」と呼ばれるようになりました。現在、旧田中家は府中宿の大店として、郷土の森に復原されています。

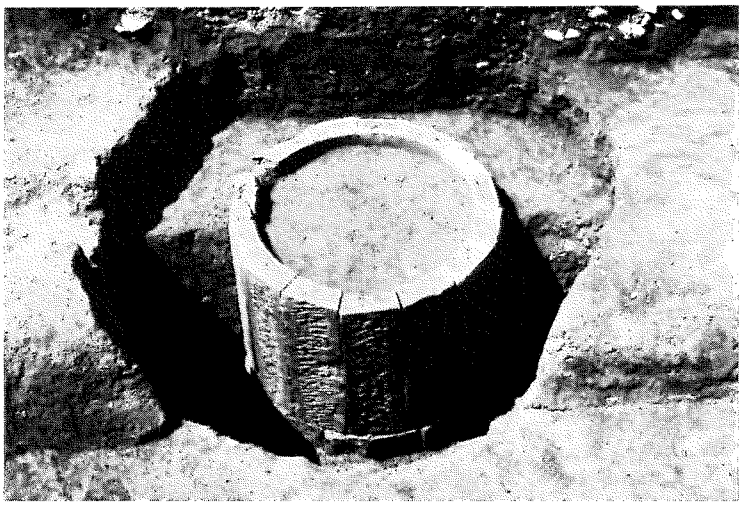
旧田中家住宅跡地は、1986年度に東側半分の調査が行われ、今回西側半分の調査によってほぼ住宅の敷地全域が確認されました。今回の調査では土蔵の基礎及び井戸がみつかっています。土蔵は、調査区南側で１棟、中央で１棟、北側で１棟の計３棟確認され、前回の調査と合わせて計４棟になりました。土蔵の基礎部分は、地表面を約１ｍ程掘り下げた後、拳大の丸い石を敷き詰めて固められています。明治期の図面などから復原した郷土の森の建物配置とほぼ一致したことになります。

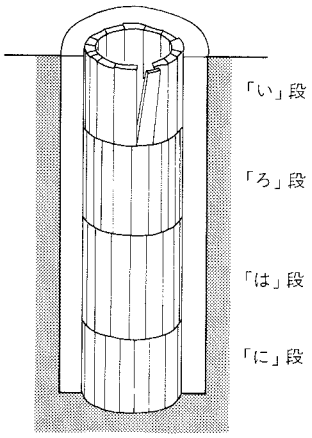
また、井戸は地表面を直径約３ｍ程の円形に掘り下げ、その中央部に平面型が長方形で彎曲する凝灰岩質の石材をほぼ円形に組み上げて作られています。一枚の石は、縦約85cm・横約20cm・厚さ約10cmで、それぞれの石の上面に、「ろ壱」から「ろ十五」までの墨書が書かれています。さらにこの段の下からは、「は壱」から「は十七」までの墨書のある井筒が見つかり、これらのことからおそらく石工が仮組みをした時に、段の名称と数字をふっておいたものと考えられます。この石段が何段あるか正確にはわかりませんが、少なくとも４段以上の石組の井筒があると思われます。当時の井戸は丸い自然石を積み上げて作ったものが一般的で、このような切り石によって組まれた石組の井戸は、府中市内では他に類例がなく、旧田中家の往時が偲ばれます。

（宮町・元再開発事務所用地地区の調査から　江口）



調査地区遺構配置図



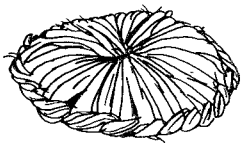


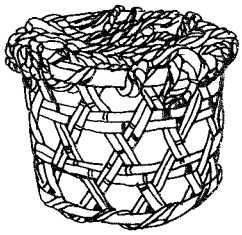
井筒復元図

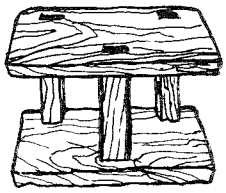
あれこれ　苗取り台

5月、田んぼにレンゲがきれいに咲いていましたが、6月に入ると田植えの季節を迎えます。

田植えの準備は、まず5月の苗代づくりに始まります。今では苗代をつくる農家は少なくなりましたが、かつてはハケ下の一面に広がる田んぼのあちこちに、苗代がみられたものです。苗代は、あらかじめオンガ（犂）、マンガ（馬鍬）、サンボンコ（三本鍬）で土を柔らかくして







おき、5尺幅の畝をつくります。次に干したレンゲを踏み込み、そのあと手でならします。1、2日おいて水を張り、タネフリをします。タネフリしたタネモミ（種籾）が苗に育ってくると、もう田植えです。

まず苗代の苗を片手で握れる程の適当な束にしてワラで結びます。この苗代での作業は、前かがみの辛い姿勢で続けられます。そこで使われるのが、苗取り台や苗取り椅子と呼ばれる腰掛けです。竹で編んだ籠に縄を張り、その上に桟俵という俵の蓋の部分を置き、座布団がわりにします。水が適当に竹の間を通り抜け、いちいち立ちあがらなくても、そのままの体勢で移動することができますので、作業労力の軽減化、効率化がはかられます。最近ではブリキの罐で代用している例もあるようです。　（G）

インフォメーション

郷土の森の 新 刊 紹 介

■府中市郷土の森展示解説書

府中の歴史と民俗と自然がわかりやすく学習できます。オールカラー版。　B5・800円

■特別展「伊勢へ奈良へ―幕末の旅と社会」図録

伊勢参宮などの江戸時代の旅とその背景となる激動の時代を探ります。　B5・500円（残部僅少）

■旧府中郵便取扱所（旧矢島家住宅）調査報告書

郷土の森に移築復原された明治の郵便取扱所の調査報告。郵便関係資料も紹介。　A4・2,900円

■府中の家並地図 ―昭和初期の町と村―

都市化する以前の町並や集落のあり方を府中市史談会の聞き取り調査により再現。　A3・2,800円

■大国魂神社文書Ⅳ　土地の部（下）・支配の部

近世宗教史・民衆史の重要な史料となる大国魂神社文書の翻刻刊行の第4冊目。　A5・4,300円

■府中市郷土の森紀要 第4号

ナカムラオニグモ、微化石分析、高安寺鉄兜、大西伍一、六所宮社木の個別論文。　B5・1,100円

あるむぜお　第16号

al museo　イタリア語
"博物館で""博物館にて"の意

発行日　1991年6月30日
発　行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町 6－32
☎0423－68－7921